



なよろ国際雪像彫刻大会2016

Contents

- 特集インタビュー
第64回なよろ雪質日本一フェスティバルに参加した世界の彫刻家たち
「世界が注目するなよろ国際雪像彫刻大会 JAPAN CUP」
- 名寄市立大学新学長インタビュー：佐古和廣学長
- ようこそ研究室へ：研究室紹介（社会福祉学科：長谷川武史講師）
- キャンパスライフ：サークル紹介「SOサークル」
- NCU Information：卒業研究発表会・報告会、卒業式



特集：インタビュー

2016年第16回なよろ国際雪像彫刻大会・JAPAN CUPに参加した国際チームのリーダーたち4人に伺いました。

2001年以来、世界のトップの彫刻家が2月の名寄に集まり、芸術性の高い雪像を名寄の雪で作りに出しています。今年も、第16回なよろ国際雪像彫刻大会として、計12チームが参加しました。そのうち海外チームは5チームで、国際色豊かな大会となりました。今回、私たちは、参加チームの国内外4チームのリーダーにインタビューを行い、雪を使った彫刻に挑戦すること、そして、名寄で行われている雪像彫刻大会の魅力などについて語って頂きました。

世界が注目する
なよろ国際雪像彫刻大会
JAPAN CUP

世界から名寄へ
～各チームのプロフィール～

1. Team Barcelona 【スペイン】



キャプテン
Emiliano Lorenzo Vicente
(エミリアノ・ロレンソ・ビセンテ)

職業：彫刻家、講師：パウ・ガル
ガヨ芸術デザイン専門学校
(スペイン・バルセロナ市)
作品名：Spring (春)

スペイン人のエミリアーノさんは、2007年なよろ国際雪像彫刻大会で優勝しました。その翌年も名寄の大会に参加しましたが、受賞に至りませんでした。そして今年、3回目の参加で久しぶりに名寄を訪れ、重力や気温に逆らう美しい作品を作り、市長賞と市民賞を受賞しました。



Team Barcelonaメンバー
← Mariona Sans Amengual
(マリオーナ・サンス・アメンガル)

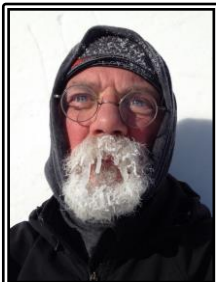
Dario Reina Gonzalez →
(ダリオ・レイナ・ゴンザレス)



Team Barcelonaの作品は、夜のライトアップでは、赤と黄色で照らされ、名寄の寒い夜の中でも雪が溶けているような作品でした。作品のタイトルのように、春を感じさせる雪像でした。



2. Team Yukon 【カナダ】



キャプテン
Donald Watt
(ドナルド・ワット)

職業：彫刻家、版画家
作品名：Raven Dancer
(踊りガラス)

ドナルドは、今回のなよろ国際雪像彫刻大会にはチームリーダーとして参加しました。ドナルドはこれまでも他のカナダチームのメンバーとして名寄の大会に参加したことがあり、今回で3回目の参加となりました。2012年の大会では、初めてチームリーダーとして参加し、見事に優勝し、合わせて芸術賞も受賞しました。2015年の大会では、3位入賞を果たしましたが、今年の大会では残念なことに入賞を果たせませんでした。



Team Yukonメンバー

← Ken Anderson

(ケン・アンダーソン)

Josh Lesage →

(ジョッシュ・ルセージ)



Snow Art Polandメンバー

← Piotr Muschalik

(ピョトル・ムスチャリク)

Piotr Proba →

(ピョトル・プローバ)



今回の作品は、カナダ北部の先住民に伝わる民話に描かれている「踊りガラス」を制作しました。その民話では、カラスは神様であり、地球に光を運び、人間と動物を創作したと書かれています。現在も、カナダ・ユーコン州の先住民たちは祭りや儀式で、カラスの仮面や仮装を身に付けて、神様であるカラスに対して敬意を表しています。今大会で完成した雪像は、すぐ踊り出すような存在感や躍動感があり、名寄からは遠いカナダ北部の大地に根付く異文化の習慣が伝わるようでした。

3. Snow Art Poland【ポーランド】



キャプテン

Tomasz Koclega

(トマス・コスレーガ)

職業: 彫刻家、講師
カトヴィツェ芸術アカデミー
(ポーランド・カトヴィツェ市)

作品名: Touch (接触)

トマスは、名寄大会への参加は今回が初めてでした。以前、来日した際には、札幌で行われた国際大会に二度出場した経験があります。2015年に札幌で行われた大会では、4位入賞を果たしました。今大会では、名寄観光まちづくり協会長賞を受賞しました。



今回のタイトルは「接触」。分厚い壁を力強く腕で貫き、一人の男が壁の向こうにいる人を抱こうとしています。しかし、実際に抱いているのは自分自身です。平和と絆を表現する作品でした。

4. Team Infinity Shape【日本】



キャプテン

尾崎 慎

職業: 彫刻家

作品名: Infinity Shape is on
Your Heart

尾崎さんは、今回は3回目のなよろ国際彫刻大会参加でした。初参加した2011年大会で優勝し、それ以降、雪像作りに対して本格的に取り組むようになりました。今大会では、2位でした。今年のチームは同じ彫刻家である小林照尚さんと長谷川政弘さんと結成しました。



Team infinity Shapeメンバー

← 小林 照尚

長谷川 政弘 →



今年のテーマは、「ミニマムから無限 (infinity)」です。それぞれの雪の塊が、絶妙なバランスにより支え合い、その積み重ねが大きな構造物へと変化するダイナミックな印象を受けました。夜の雪像は、ライトアップによって幻想的な雰囲気でした。

Q1: 雪像彫刻を作り始めるきっかけについて教えてください。

Emiliano

1994年にカナダを旅しているときに、たまたまケベックで行われていた雪祭りを見ました。そこで雪像を見て、あまりにも印象的だったので、スペインのバルセロナに戻ったときに、カナダの大使館に行って、どうしたら雪祭りに参加できるのか尋ねました。当時は、インターネットもない時代でしたので、このような大会に関する情報は全くなかったのです。それから数年経って、スペインとフランスの間にあるアンドラ公国でそのような雪像コンテストがあることが分かり、その大会に初めて参加しました。

Donald

話は長くなりますが、カナダの大草原の中で育ち、冬が長く、そして雪も多くて、雪のある生活は人生の一部になっていました。雪を美術の素材として使うという考えはありませんでしたが、スノーマンをよく作ったりしていました。スノーマンを作るときには、カナダでは3個の丸い雪を積み重ねるのが一般的ですが、私は足を付け加えたり手をつけたりという工夫をして楽しんでいました。10歳から11歳ころに、カナダのケベックで行われていたQuebec Winter Carnivalに行き、そこで氷像や雪像のコンテストが行われていることを知りました。そこで父が、私に「雪像作りをいつかやりたいな」とたばこの煙を吐きながら言い、続けて「ドナルド、おまえがやりたいと思えば、何でもできるぞ」と言いました。

高校生の頃には、勉強にはあまり興味がなかったのですが、美術には興味がありました。高校の先生が彫刻に興味を持っている学生を集めて、ショッピングセンターの駐車場に連れて行き、除雪で積まれた雪を利用して雪像を作る授業をしたことがあります。1980年代には、私はユーコン州に住むようになり、そこでは小さな雪祭りが行われていました。その雪祭りで雪像コンテストが行われてたので参加し、優勝しました。賞金は500ドルでした。次の年も参加して優勝しました。ちょうどその年に、カナダ・ケベックのQuebec Winter Carnivalでカナダの各州の雪像制作チームが参加するイベントを開くということで、ユーコン州代表で参加することになりました。この頃から、この名寄を含めた色々な雪像コンテストに参加しています。

Tomasz

3年前に氷像コンテストに誘われました。でも、氷像にはあまり興味がなかったので断りましたが、そのコンテストに雪像部門があると聞き、参加することにしました。雪は、日ごろ自分が作っている彫刻の素材であるグラスファイバーやポリエステルに白いという点で似ています。また、雪像は野外でスケールの大きい作品を作るということで、日ごろ行っている制作と共通点が多くあります。素材は違いますが、見た目は良く似ています。そのような部分は雪像作りに惹かれたとことです。さらに、雪像作りを始めたのは、自分の若い頃の原点に戻るという意味もあります。私は作品を作り始めた当初、紙を使って作品を作っていました。すぐく壊れやすく、保存がきかない作品でした。雪像も溶けたり、崩れやすいため、原点に戻るという意味で興味深い素材でした。また、雪像はチームで作るものです。その部分も私にとっては非常に魅力的でした。

尾崎

雪像を作り始めたきっかけですが、宮崎空港展という全国の作家が集う彫刻展があり、世界から集まる作家の略歴の中に雪像大会の経歴があり、興味を持ち参加したのが最初です。

私が参加したのは、2011年大会からです。そのときは、メンバーの欠員があり参加したのですが、その年初参加で優勝しました。もちろん、そのとき雪像を作成した他2名はベテランでした。

雪像作りの面白さは、その前から聞いていたし、普段作る彫刻とは違った儚さに魅力を感じました。



Q2: この大会に申し込んだ理由と、この大会の魅力について教えてください。

Emiliano

アンドラ公国で行われた雪像コンテストに参加したあとに、いくつかの雪像コンテストに参加しました。その中で、北イタリアにあるイニチエンという町で行われた大会に参加しました。他の国からもたくさんの彫刻家に参加しており、色々な国の方と知り合いになりましたが、その中のメキシコ人と話をして、名寄の大会について聞きました。そのメキシコの方は、「名寄の大会は今まで参加した大会の中で一番雪質が良い」と言っていたので、名寄に行って雪像を作りたいと思いました。



<Q2の続き>

Donald

大会に参加したと思う理由はたくさんあります。私は、毎冬にいくつかの雪像コンテストに参加しています。その大会が開かれるタイミングなどもありますが、最後に参加する大会は地元の大会と決めているので、タイミング的に名寄の大会はちょうどいいのです。毎冬世界一周のように雪像コンテストに参加しているので、その一つが名寄ということになります。タイミング的にも名寄はいいのですが、名寄の大会に参加している大きな理由は、「人と雪」です。名寄は、人もすばらしいですし、文化も興味深い。あとは、雪です。世界で行われている全ての大会は、「うちの雪が一番」と主張していますが、私は名寄の雪質が一番だと思っているので、名寄が「雪質が良い」と言っていることに関しては「異議なし」です。

Tomasz

この大会は、芸術性が高いことが魅力です。雪像作りに興味湧いた頃、日本で行われている雪像コンテストの結果をインターネットなどでみました。様々な結果を見た中で名寄の雪像は非常に芸術性の高いものでした。また、雪像全体のスタイルがヨーロッパ風に見えました。例えば、ハルピンでは中国風のスタイルです。ヨーロッパ出身の自分にとっては、名寄の大会は自分のスタイルに合っていたので、参加することになりました。

尾崎

海外で、様々な大会に参加する中で、名寄の雪のクオリティを実感しました。なよろの雪は、ここでしか出来ない形へのこだわりを持つことができます。この大会の魅力は雪質と大会全体のアットホームな温かさです。



Q3: 名寄大会は、皆さんがこれまでに参加した他の国の大会と比べて、何か違いを感じることはありませんか？また、この大会の特徴を教えてください。

Emiliano

この大会に最初に参加したときは、子どもたちと一緒に参加しました。初めての土地でしたので、不安の中で参加しました。日本人とどのように対応したらいいのか、地下鉄にはどう乗るのかとかいろいろありました。いくつかのトラブルもありましたが、その中で日本人の国民性、優しさを感じることができました。日本の文化を感じました。だから、この大会に参加する魅力の一つは、他の国とは違う文化を感じることができることですね。あと、この大会で感じるのには、食べ物の違いですね。地

中海とこのあたりでは食に関して大きく違います。その点は、おもしろいですね。また、名寄の大会は、とてもアットホームなので、第二のふるさとのように感じています。

名寄の大会の進行は、他の国と違います。他の国では、開会式と閉会式があるくらいで、セレモニーがシンプルですが、名寄の大会では、それ以外に色々な催しがあるので違いを感じます。食事に関しては、全てのチームと一緒に食べます。この点は、とても良いですね。他のチームとよくコンタクトをとることができるので、それはとても楽しいですね。

世界の大会と名寄の大会の大きな違いは、雪質と雪のブロックの作り方です。ブロックについては、非常に良く踏み固められており、そのブロックの中に氷などの雪以外の物が混ざっていないので、非常に良いですね。雪だけで、これだけ均質なブロックを提供してくれる大会はないですね。



それぞれのやり方があります。良いとか悪いとかではなくて。全て良いという大会はないです。年数が経てば、スポンサー、主催者、ボランティアも変わります。もちろん名寄も変化していますが、名寄の運営などは私に合っています。

Tomasz

私は雪像制作歴が3年ですので、経験した大会がハルピンと札幌と名寄です。名寄の大会はとてもフレンドリーな雰囲気です。名寄という地域が一体となってこのコンテストを行っていると感じます。名寄の地域の方々やボランティアスタッフの皆さんが、自分たちの大会と思いつつ、この大会の運営に関わっています。だからこそ、歓迎も暖かく、私たちにに対する対応もとても親切に感じます。私は、これまでに参加した大会では名寄が一番です。とてもいい雰囲気の中で楽しく過ごしています。小さい町なのに最高の雰囲気です。

尾崎

この大会では、毎晩のように温かいおもてなしを受けました。お屋のお弁当も手作りのお弁当で、また、サポーターの方々のケアがすばらしいです。これだけの人達が力を合わせて作り上げている大会は、どこにもありません。

Q4: 雪という特殊な材料を使って、彫刻をつくることで難しい点や挑戦的に行っている試みはありますか？

Emiliano

雪という素材を使うと言うことは、デザインに対する挑戦が大きいですね。例えば、雪像がぎりぎり倒れないようなデザインを作るなどです。2007年には、洞窟の中にマンタがぶら下がっているようなデザインに挑戦しました。そのデザインは、マンタをぶら下げる点においてリスクがありましたが、高い評価を受けて優勝できました。2008年には、蓄音機(Phonograph)を作りました。ラッパの部分が重く、ラッパを斜め上方向に向けるなどのリスクがありました。表彰されませんが、制作者としてはかなり達成感がありました。今年の作品もリスクを持っていました。物が溶けているようなデザインのものを作成しましたが、まさか、最終日に気温が上昇して本当に溶けてしまうとは思いませんでした。でも、このようなリスクを持ったデザインを作ることができるのは名寄の雪だからです。

雪像の難しいところは、天候に左右されるという部分です。ある程度天候を予想して作成しますが、チャレンジ性とのバランスは難しいです。

Donald

雪像作りで天候は非常に大きなポイントになります。それに加えて、道具、服装などが重要です。あとは、チームワークですね。お互いの考えを一致させて雪像を作ることが大切です。デザインはひとりですることができますが、雪像作りはみんなで行う必要があります。その場合、お互いの考え方を理解しておくことは大切です。

また、雪という素材の特徴をよく理解することが大切です。乾燥しているときもあれば、湿雪の場合もあります。色々な変化が生じることを理解することが大切です。でも、このような難しい部分があるからこそ雪像作りはおもしろいと思います。



Iomasz

一番の挑戦は、グループで作成することです。チームで作ることと一人で作るとは全く違います。自分が担当するところも作りますが、ほかの二人の部分も気を配りながら作成を進める必要があります。私のチームは私だけが彫刻家で、他の二人は彫刻を主体にした芸術家ではありません。したがって、彼らは彫刻に関して不慣れな部分があるので、私が彼らの作成について励ます役割も担います。「この部分削っていいよ」とか「ここを削るのはリスクがあるけどやってみよう!!」など励まし

ながらやっています。

自分がいつも彫刻に使っている素材であるグラスファイバーなどは、彫刻に足す形で造形していきますが、雪像はその逆です。削って形をつくります。それは、自分にとって面白い部分でもあり、挑戦的な部分でもあります。

尾崎

雪を使うことが他の素材を使う場合と異なることは、気温や天候に左右されりために、その時の状況に合わせて仕事を進めなくてはならないことです。今大会では、雪作りのために、新たな道具を作って挑みました。



Q5: 今までの専門家としての活動の中で、一番役に立った能力を教えてください。

Emiliano

一番大切なことは、最終的な形をしっかりとイメージして、雪像作りに取り組むことです。今まで長く雪像作りをやっていますが、一緒にやった人の中でもしっかりとイメージを持って取り組める人はそんなに多くはないです。雪像は、作り始めると雪を大量に削りながら作業を進めます。それは製作者にとって大きなストレスを感じる部分でもあります。だからこそ、しっかりとイメージを共有することはとても大切です。私自身は、イメージを持つことに関して長けていると思いますが、それでも時々進め方がわからなくなるときもあります。でも、しっかりとイメージを持っていれば、困難な状況が訪れても克服できます。

難しいところは、チームメイトが大会ごとに異なることです。初めてのチームメイトには、自分のやり方などについて初めから教える必要があるため、時間的に負担になることがあります。一方で、新しいチームメイトと仕事をするのは、その人の文化や考え方に触れる機会でもあるので、それは私にとってとても有意義なことです。



Donald

雪像の大切な部分は「Three T's」で表すことができます。それは、道具 (tools)、チーム (Team)、時間 (Time)です。30年の経験の中でわかったことは、適切な道具を適切なチームに与え、そして時間を十分に与えることがとても大切だということです。これらを上手に行うことができれば、素晴らしい作品の完成につながります。

Tomasz

忍耐力がとても大切です。今の時代はとても早く時が流れています。また、はいろいろなことを同時に行うこともあり、一つのことに集中できる時間が少ない。雪像作りには忍耐力が求められますので、今やっている作業にいかに集中できるか、それがとても大切です。

尾崎

仕事の時間配分が効率よく考えられるため、それに伴って作品のクオリティを高めることができます。形を作り上げて行く上で、今まで培ってきた経験を活かすことができ、また、多くの方々と触れ合いながら、作品に広がりを見出せることなどが雪像作りの魅力の一つです。出来上がった作品の完成度が高く、それを見た人が喜んでくれるなど、見て下さる人達の反応を見るのが楽しみです。



Q6:最後に専門職を目指す本学の学生にアドバイスやメッセージをお願いします。

Emiliano

とにかく、旅をすることです。外を見なさいということです。旅が一番良い学校です。私が良いお手本です。

Donald

たくさんの人と話をしてください。そして、いろいろな人の仕事ぶりをよく見てください。雪像作りで例えるなら、どのような道具を使っているのか、どのような取り組み方をしているのか、よく見るということ。そして、アドバイスも聞いてください。自分の限界まで良く理解した上で挑戦する。挑戦しないことには、うまくいくかどうかはわかりません。挑戦してください。

Tomasz

自分らしく、ありのままに過ごすことが大切です。そして、一步一步確実に歩んでいけば、必ず目標に達します。専門性に対して、真剣に取り組むことです。そして、自分が行うことに関しては、その結果を自分の責任として受け止めることも大切です。

尾崎

私は、今彫刻家として活動していますが、どんな世界でも、もうこれ以上進めないと思った先に光が有るのだと思います。諦めずに耐える気持ちと強い精神力。これまで私が歩んで来た道は決して平坦ではありませんでした。そして、この先も同じだと思っています。大きな壁に当たった時、それは一つのチャンスだと考えます。その壁を乗り越えた時、新たな物が見えると信じています。学生の皆さん、壁を避ける様な生き方をしない事です。目的をしっかりと持って生きて行って下さい。



名寄市立大学 新学長インタビュー

2016年4月、名寄市立大学は佐古和廣氏を新学長として迎え、新しいスタートを切りました。学長として名寄市立大学の目指す方向性や、社会保育学科とコミュニティーケア教育研究センターが立ち上がることへの思いなどについて語って頂きました。

名寄に最初に来たのは20年以上前。 名寄のことは大好きです。

広報委員：学長の経歴について教えてくださいませんか？

佐古学長：1949年4月28日生まれ、現在66歳になります。出身は北海道砂川市です。滝川高校を卒業し、1969年に北海道大学の医学部へ入学、1975年に卒業しました。

広報委員：医師を目指したきっかけは？

佐古学長：子どものころは、強く医者になりたいと考えたことはありませんでした。ただ、自分でリーダーシップをとることができる仕事に就職したいと考えていました。例えば、立派な会社に入っても、上下関係など様々な人間関係があり、自分が思うように仕事できない部分があると考えていました。その点において医師は、大学教員に近いかもしれませんが、比較的独立していて、その部分に惹かれたところがあります。また、職業について色々考えている頃は、医学部に行くか、法学部に行くかで迷いました。全然方向は違いますが、やはり弁護士も独立して仕事をする部分が大いなので、それで悩みました。



広報委員：医学部を卒業されたあとについて教えてください。

佐古学長：北海道大学卒業後は、北海道大学病院の脳神経外科に入局し、3年間北海道大学で勤務しました。そのうちの1年間は、小樽市立第二病院に勤務しました。私が医学部生をしていた1973年に旭川医科大学が新設され、1976年に大学付属病院が稼働し始め、1978年に旭川医科大学に移りました。旭川医科大学着任後に2年間カナダのモントリオール神経研究所に留学しました。留学中は、PET (Positron Emission Tomography) を用いた研究に従事しました。現在PETは、診察にも使われるようになり、身近な画像診断装置となっていますが、当時はかなり先進的な機器でした。モントリオール神経研究所は、脳の体部位局在を作成したペンフィールドが設立した研究所で、私は脳循環代謝に関する研究を行いました。カナダ留学後、旭川に戻りました。その後、1992年に名寄市立総合病院の改築に際して、脳神経外科を立ち上げることになり名寄に来ることになりました。当時、旭川以北には脳外科の施設は全くなく、名寄に脳神経外科ができることは、この地域で関連する疾患を抱えている方にとっては非常に大きなことであったと思います。1992年に名寄に来まして、2年間勤務しました。その後、また旭川医科大学に戻り、4年間勤務しました。1998年に、当時の名寄市立総合病院院長に、その後名寄市立大学の初代学長になれる久保田宏先生が就任されて、久保田先生より副院長として名寄に来てくれませんかとお誘いがありました。そのような縁もあり、1998年以降はずっと名寄市にいます。久保田先生が2003年に病院長を退任されたあとに私が院長を引き継ぎまして、10年間病院長として勤めました。その後は、名寄東病院院長になり、3年間勤めました。そして今年度より、名寄市立大学の学長になりました。

広報委員：名寄での医師としての活動の中で印象深いことはありましたか？

佐古学長：大学で長く医師として働いて、その後、名寄に来ました。大学で仕事をしている頃は臨床教育や研究の中で、自分がやっていることの成果が目に見えることは少なかった。そのように感じていた中で、名寄に来て、名寄市立総合病院に道北地域初となる脳外科を作りました。脳外科ができるまでは、救急患者を旭川まで運ぶ最中に亡くなってしまおうという悲しい事例もありました。私が名寄に来るにあたって心に決めていたことは、少なくとも脳外科の患者を旭川に救急搬送するようなことはしないということです。そのような体制で半年ほど経つと、住民の皆さんから「昔よりも良くなった」という評価をいただけるようになり、自分のやっていることに対する成果が目に見えました。成果が見えるところが自分にとってはとても印象深いことで、働くことへのモチベーションにも繋がりました。その後、旭川医科大学の事情で

旭川に戻ることになりましたが、旭川に戻るときにはとても悩みました。ずっと名寄にいたいという気持ちがかかなり強かったことを思い出します。その後、久保田先生から「また名寄に来て欲しい」と声を掛けて頂いたときには、全く迷い無く名寄に戻ってきました。私は、とても名寄が好きです。

もう一つ印象深かったことは、道北脳卒中研究会というのを立ち上げて、道北地域の脳卒中患者のデータベースを構築して研究したことです。脳卒中の発症率や、どのような危険因子があるのかなどについて研究しました。このような研究は、このような小さな地域だからこそできます。大きな町では、人口移動が激しいためできません。地方は人口移動が少なく、特に脳卒中になりやすい年齢の方は移動が少ないため、長期的な追跡研究ができます。このような研究の一環として、北見枝幸に脳卒中サテライトクリニックを開設し、月一回名寄市立総合病院から医師を派遣して、診察しています。それまでは、その地域の患者さんは名寄市立総合病院まで通っていました。でも、そのクリニックの開設によって医師が一人動けば患者さん50名ほどは動かなくて済むということになりました。高齢者で麻痺がある患者さんなどは、通院するにも家族が仕事を休んで名寄まで連れてくるなどの負担が非常に大きかったわけですが、負担軽減にも繋がっているのではと思っています。この取り組みは現在も継続しています。また、このようなことができてるのは、その前から取り組んだデータベースの構築が非常に役に立っているのです。このように研究と臨床の結果がすぐに見えると言うという点が医師をやっている印象深かった部分ですね。

コミュニティケア教育研究センター設立 地域の課題を調査し、行政に提案する組織に

広報委員：今年度よりコミュニティケア教育研究センターが設立されましたが、今後の活動について教えてください。

佐古学長：コミュニティケア教育研究センターは、これまで本学にありました道北地域研究所と地域交流センターの一体化ということから議論が始まりました。当分は、その二つ機関が持っていた機能を併せた活動ということになるかと思えます。ただ、二つの機関の機能を併せ持つということとは、これまでにはできなかったこともできる可能性がありますので、活動範囲を広げていきたいと考えています。

私は、地域の抱えている課題に対して大学が果たせる役割は大きいと思います。大学には色々な分野の専門家がいます。それらの専門家が、課題に対する答えを提案していくことが大切だと思っています。例えば、子どもに対して、特に就学前の幼児教育、保育含めて、そこに社会保育学科が関わる取り組みができると思えます。しかし、幼児教育の中には、例えば病気になるとか、事故などの問題も発生します。そこに看護学科も加われば助けになると思えます。このような学科をまたいだ支援ができるようにしたい。このような活動や提案が円滑にできるように、マネジメントする機能もセンターに持たせていきたいと考えています。

次に、名寄の農業の問題ですね。大学には農業経済学の先生もいますので、名寄も直面しているTPPの問題や6次産業化の問題などを、センターも関わりながら色々な視点や知識をいかして助言や提案できるようになれば良いと思います。

また、高齢者の単身高齢世帯が全国的に増えている状況にあります。実際、名寄市が状況を調べていると思いますが、そのような調査に大学も関わりながら調査を行うことも大切かと思っています。一人高齢世帯だからといって困っている人もいれば、困っていない人もいます。一人高齢世帯の実状を調べてみることはとても大切だと思っています。そして、そのデータに対応して、課題に対する支援を考えることが重要です。いくつかの生活パターンに対するマニュアルであるとか、そういったものを提案することが可能になると思えます。センターの1年目は基礎データの収集に注力できればと思っています。

大学が地域の実態調査を行って解決策を探ることは大切だと思っています。その中で名寄市と協力して行くことも必要になると思います。なぜなら、支援には、お金が伴う部分もあるからです。そのような調査をもとに現在行われている市の政策に対して、お金の使い方が適切かなども含めて市と議論することも大切だと思っています。支援が必要な人、必要ではない人がいます。そのような部分を実態調査を通じて明らかにし、本当に困っている部分を明示して、市へも提言できるような組織になっていけばと思います。このような取り組みが大学の存在価値を高めることに繋がると考えています。このような活動を全国に発信することで、ロールモデルのような存在になれるのではないかと思います。



4月1日にスタートしたコミュニティケア教育研究センター
結城佳子センター長（看護学科教授）
（左）と佐古和廣学長（右）

社会保育学科スタート

保育界のリーダーを養成したい

広報委員: 学長就任と同時に保育士や幼稚園教諭養成を目指した社会保育学科が開設されました。社会保育学科が目指すものについて教えてください。

佐古学長: 社会保育学科の目指すところは、保育士の資質のレベルアップです。これが社会保育学科の最大の目標だと思います。幼児教育は、その人の生き方に非常に大きな影響を及ぼすと言われていています。例えば、アメリカのノーベル賞学者のジェームズ・ヘックマンが行った、低所得者のアフリカ系の子どもを対象に幼児教育を施したことの有無による影響について、彼らが40歳になったときの生き方を調査した研究があります。その研究では、幼児教育を受けたからといって、その子どもの知能指数に大きな影響を与えないが、幼児教育を受けた子どもは、40年後に生活保護を受けている比率が非常に低い、裏返せば生活保護非受給者の割合が非常に高いというデータがあります。この結果が示すことは、幼児教育は、生活力の向上に繋がるということです。学校の勉強で得られる学力と生活力は違います。生活力は、人とのコミュニケーションの能力などによって養われる部分があるので、幼児教育の時期に高い資質を持った保育士が関わることによって、幼児教育を豊かにすることが20年後や30年後に日本の社会に大きな影響を与えると考えています。4年制の保育士養成施設は、北海道内の公立大学では本学だけです。ので、本学から保育界のリーダーを養成できるような存在になれればと思っています。

これからのケアを考える大学に

市や総合病院と関わりながらケアに関する研究の推進を目指す

広報委員: 前学長の青木先生は「ケアの未来をひらく」というキャッチフレーズで様々な取り組みをしてきましたが、佐古学長はケアに関してどのような考えをお持ちですか？

佐古学長: これからは、ケアのあり方が変わらざるを得ない時代に入ると思います。需要と供給を考えても、従来通りのシステムで円滑にケアが進むとは考えにくい状況になりつつあります。このような状況から、現在盛んに研究が進められているIT技術を取り入れる等の考え方が主流になるかもしれません。また、現在中年の方が10年後、20年後に高齢になったときには、今使っているスマートフォンなどのような機材を使いこなせることから、それらを使った在宅医療が盛んになることも想像できます。実際、現在スマートフォンなどを使う取り組みは、実験的に行われている地域があります。そのような先進的な取り組みを視察して、名寄市立大学が関わりながら名寄市のケアに取り入れていくのもとてもおもしろいと思います。そのような取り組みをすれば、必要の無い病院受診なども減り、病気の早期発見にも繋がると思います。そのような先進的な取り組みも含めて、病気になった人を対象にするだけでなく、予防も含めたケアのあり方を大学から提案していきければとても良いと思います。大学と市立病院が協力して、様々な取り組みができると思いますので、積極的に共同研究という形でも進めて行ければ良いのではと思います。

私は、名寄市立総合病院との共同研究は積極的に進めたいと思っています。例えば看護部は看護部なりの患者さんに対する課題を持っています。でも、業務の関係で研究というところまでなかなか行くことができない。そのような課題に対して、大学の先生も加わりながら研究できれば素晴らしいと思います。そのような研究は大学の先生の業績にもつながり、大学の価値を高めることにもつながりますので、たくさんできるようになればと考えています。

教育力・研究力のアップを

学生的心声をよく聞きながら学習環境の改善にも取り組みます

広報委員: 教育や研究の方向性について教えてください。

佐古学長: 私は、大学の研究力をアップしたいと思っています。先ほども申しましたが、地域に貢献できるような研究を進めることはとても大切です。そして、現在は国の公的な研究資金として科学研究費補助金などの競争的獲得資金がありますので、そのような資金を確保できるような研究も推進したいですね。

また、教育については、学生のアンケート調査などをよく精査して学生の要望についてよく理解しながら、教育力の向上も目指していきたいと思っています。例えば、アンケートでは、



建設が進む新図書館。2017年4月の開館を目指して建設中です。蔵書数は14万冊を予定しており、ラーニングコモンズなど学習環境も整備されます。

e-learningの充実を図って欲しいとか、図書館やコンピューター室の休日開館など色々な要望が出ています。休日開館などについては、管理する人に対する費用の問題があるため、すぐに解決できる問題ではありません。しかし、学習環境の改善と言うことから考えれば、しっかりと検討しなくてはならないと思っています。図書館の開館日については、新図書館が完成すると解決できる部分も出てくるかもしれませんね。現在、様々な大学では24時間開館などが実施されていますので、そこまでは難しいですが利便性を高める努力をしていきたいと思っています。

名寄市立大学の教育の指標として、わかりやすいのは国家試験の合格率だと思います。現在のところ本学の成績は悪くはないと思っています。もちろん、これからも高い合格率をめざして、各教員が団結して教育に取り組んで欲しいと思っています。教育の指標としては、もう一つ学生からの評価があります。講義の評価ですが、学生の評価が全て正しいとは限りませんが、一つの指標ではあります。学生の評価を公開したり、その評価を評価するようなシステムが必要なのかなと思います。年間を通じてすばらしい教員を表彰するようなシステムがあっても良いのではと思っています。そのような取り組みが、教員の教育力の向上に繋がる部分もあるかなと考えています。

挨拶のできる、そして広い知識を持つ学生に

広報委員: 学長が求める学生像を教えてください。

佐古学長: 学生には、「あいさつ」をしっかりできるようになって欲しいですね。挨拶をすることは、人とのコミュニケーションの始まりですし、とても感じがいいです。挨拶をすることは、これまでの短期大学時代を含めて本学の伝統として学生の間で自然と受け継がれてきたものだと思います。この伝統は絶対に守りたいと思います。あと学生に求めることは、幅広い知識を持つことです。自分の専門領域だけではなく幅広く知識を持って欲しい。人と関わる上では、色々なことを知っていることはとても大切だと考えています。大学生活の中で、自分が経験したことがないようなことをたくさん経験して、色々な考え方を4年間で習得してほしいですね。

広報委員: 学長がこれまでに影響を受けた本や是非読んでみて欲しい本などありますか？

学長のおすすめの本

佐古学長: 私が、他の方にも読んで欲しいと思う本は「イノベーション・オブ・ライフ: ハーバード・ビジネススクールを巣立つ君たちへ」という本ですね。この本に関しては、2012年に翻訳本が出たのですが、私はそれを読んでとても感動しました。たぶん、この本を私が若い時に読んでいたなら、自分の人生が変わったかもしれないと思っています。あともう一冊あげるとすれば、山本周五郎の本で、1971年に書かれた「ながい坂」ですね。下級武士の子どもが出世する話ですが、その道のりは平坦な道のりではないですが、強い思いを抱き続けながら進めば何かを成し遂げることができるということが書かれている本です。あきらめない気持ちを持ち続けることこれが大切だと感じさせてくれる本ですね。皆さんに是非読んでみて欲しいです。

仕事は楽しんでやるもの

自分のやりたいことを目指す道筋として名寄市立大学を目指して欲しい

広報委員: 最後になりますが、本学を目指す高校生にメッセージをお願いします。

佐古学長: 私が高校生の皆さんに言いたいのは、自分の将来は、高校時代に考えていることとは必ずしも一致しないこともあるけれども、大学を選ぶときに「自分が何をしたいのか」を追求して欲しいということです。大学のブランドではなく、自分がしたいことを追求して、その進路を決断すれば、人生の方向性を大きく誤ることはないと思います。もう一つは、将来仕事を持ったら「仕事は楽しんでやる」ということ。生活のために嫌々働くのではなく、楽しく働くこと、これはとても重要だと思います。そういう意味でも自分のやりたいことをしっかりと見据えて行動に移すことがとても大切だと考えています。是非、その「やりたいこと」や働きがいのある職場を目指す道として本学を目指してくれると良いと思います。

<学長のおすすめ本>

1) イノベーション・オブ・ライフ: ハーバード・ビジネススクールを巣立つ君たちへ
クレイトン・M・クリステンセン著(桜井祐子訳)(翔泳社、264ページ)

2) ながい坂(上下巻)

山本周五郎著(新潮文庫、上巻550ページ、下巻555ページ)

ようこそ研究室へ！！

名寄市立大学の研究最前線を紹介します。

セーフコミュニティ機能の応用方法に関する研究

保健福祉学部 社会福祉学科

講師

長谷川 武史



研究の背景

セーフコミュニティ(以下SC)はWHO(世界保健機関)の関連組織によって審査・認証を受けたコミュニティのことで、コミュニティ内の住民に身体的・精神的な被害を及ぼす事故・暴力・犯罪・自殺等(あらゆる外傷事象)の脅威に対して住民やコミュニティ内の機関が連携を図り地域全体で対策にあたる「セーフティプロモーション(以下SP)」に取り組んでいるコミュニティを指します。

現在、日本国内においても認証を目指すコミュニティが増えてきています。今日の地域づくりとして、地域住民がまちづくりやその計画作りに積極的に参加していくことが大切とされていますが、その方法に苦慮しているコミュニティも少なくありません。SCの中心となるSPのような住民参加と、自治体内の各機関が効果的な連携体制を構築することが、安全・安心な地域づくりには大切であると考えられます。

研究の概要

安心感を人々が得る方法には、能動的に得る方法と無知的に得ている場合があると考えられます。能動的とは、生活の中にどのように危険が存在するのか、それを見つけ、対策方法を検討・実践する中で、安全を実感して安心することなどです。無知的とは、これまでの経験で生活するコミュニティを信頼している場合や、その危険に対して具体的なイメージが付かないため漠然と安心している場合などが考えられます。

住む地域や状況によって、人が安心を得る方法は大きく変わります。また生活上のあらゆる危険すべてを一個人だけでは対応できません。どこまでの危険に対して個人で対応しなければならないのか、どこからは地域や行政にその対応を任せられるのか、SCでは、これらの状況を各コミュニティ内で検討し、そのコミュニティの課題は何か、住民と行政や各関係者が共同で対応しなくてはならないことは何か、コミュニティ内で共有化することが可能になります。

また、一般的に発生頻度の低い危険の場合、例えば想定される被害が大きくても費用対効果が悪く、住民の関心の低さなどから対策がとられず、一度発生すると被害が拡大してしまうことが国内でも多くの事例が存在します。SCでは、不意に危険が訪れて被害が拡大しないよう、日常から検討が必要なる事柄を主観的・客観的にとらえて、その意識と対策を整えることが可能と考えられます。

SCのこのような機能や取り組みを踏まえて、現在の研究テーマとしては、日本国内のSCにおける高齢者を中心とした外傷事象防止への取り組みを、SC 成立の経緯と現在の取り組み状況から分析を行い、他のコミュニティにおける高齢者の安全・安心なまちづくりへ応用していくことを目的としています。今後も高齢化が進行していく中、限られた人材や資源の中でどのように安全・安心な生活を保障していくのか、多くの自治体でその対策が求められています。

今までのまちづくりやその政策は、生活全般を捉えた安全・安心に取り組むという視点が希薄であったと捉えています。SCでは全住民の安全への外傷脅威を網羅的に把握し、その防止策をコミュニティ内の住民や関係機関(首長・議員・保健医療福祉専門職・民間企業・学校・消防・警察・NPO 等)の合意により対処していくものであり、国内のSCで確認される機能とその手法を明らかにすることで、他の地域での住民全体の生活を支えていく方法への応用が可能になると考えています。

今後の展望

現在は、国内のSCの活動実績を分析している最中であり、外傷事象の低減への効果や住民意識への影響を整理しています。今後は、国内のいくつかのSCに対して、SC 認証までの取り組みと現在の活動状況について調査予定です。

SC における関係機関には、安全・安心への脅威となる事象に取り組むための有機的な繋がりが求められます。SCの効果を検証していくためには、各関係者がどのように協働関係を形成・維持できているかの把握が必要となります。把握方法の1つとして、「人と環境の結び付き」という視点で捉えるソーシャルワークの視点が重要であると考え、SC内での関係性の構築方法やそれを元にしたまちづくりの実践をソーシャルワークの視点から分析していく予定です。また、実際にSP活動を行っているコミュニティでは、コミュニティソーシャルワーカーを独自に配置し、住民の生活課題の発見や早期対応を行っている事例もあり、SCのソーシャルワーク機能への影響や効果も今後検証していく予定です。



キャンパスライフ

SOの活動で視野が広がった！

こんにちは！SOサークルです。
「SOってなに？」と思う方も多いのではないのでしょうか。簡単にご説明させていただきたいと思います。SOとは、「Special Olympics (スペシャルオリンピックス)」の略称であり、主に知的障害児や知的障害者へのスポーツの機会提供を行っています。また、SOに参加する知的障害児や知的障害者の方々を「アスリート」と呼び、一緒に活動をしています。何やら難しく聞こえますが、スポーツを通じて色々な人と関わりながら楽しく活動している団体です。

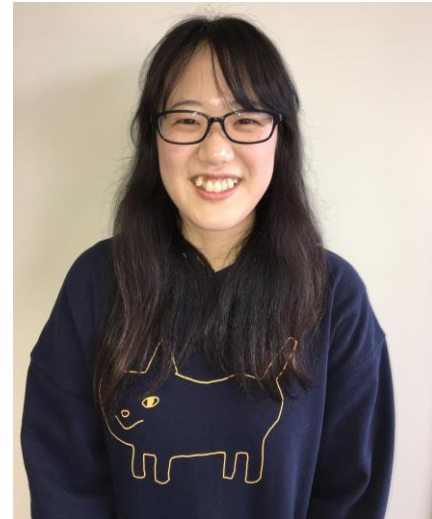
SOサークルは、2015年度の活動として日常活動のほか、全国各地のSO活動にも参加をしてきました。2015年11月7日～8日には学生3名が東京に行き、活動の報告、全国のSO関係者との交流を行いました。これは「ナショナルミーティング」と呼ばれ、2年に一度行われている全国会議のようなものです。名寄にいただけではできない体験をし、視野が大きく広がるきっかけになりました。東京での体験に関しては、本学学内でも報告を行いました(写真1)。

SOサークルは、2016年2月12日～14日に新潟で行われた冬季全国大会にも北海道選手団スタッフ、大会運営ボランティア、北海道からの広報として学生6名が参加しました。大会を通じて様々な役割を体験する中で、知的障害児や知的障害者の方とスポーツを行うことも重要ですが、彼らのサポーターとして寄り添うこと、「一緒にいる」ことの大切さを改めて感じる事ができました。写真で示したのは、選手団と学生スタッフの集合写真(写真2)と大会時の学生

とアスリートの2ショットです(写真3)。

SOサークルは様々な活動に参加していますが、参加条件等はなく、「行きたい！」と思った学生なら誰でも参加することができます。スポーツと聞くと、運動ができないとだめなのでは…と考えてしまうかもしれませんが、実際に活動している学生のほとんどは運動が得意ではありません。そうした意味でも、誰もが参加できるサークルではないかなと思います。

2016年度もさらに力を入れて活動していきますので、よろしくお願いいたします！



SOサークル
三浦夏実さん
北海道千歳高等学校出身
社会福祉学科4年



写真1



写真2



写真3

NCU Information

保健福祉学部の卒業論文の発表会・報告会、児童学科の卒業公演が行われました

2015年度の締めくくりとして、保健福祉学部栄養学科、看護学科、社会福祉学科の3学科では卒業論文の発表会・報告会が開かれました。また、短期大学部児童学科では卒業公演が行われました。



栄養学科卒業論文発表会（2015年12月18日・19日）



社会福祉学科卒業研究報告会（2016年2月16日）



児童学科卒業公演（2016年2月21日）



看護学科卒業研究報告会（2016年3月1日）

卒業証書・学位記授与式が挙行されました(2016年3月17日)

平成27年度名寄市立大学・短期大学部卒業証書・学位記授与式が挙行されました。輝かしい社会人としての一步を踏み出しました。



編集後記:

今年の雪質日本一フェスティバルは予想外の暖かさと悪天候で、いくつかの行事が中止になりました。早い春の訪れを期待しましたが、寒さが戻ってきました。ようやく吹く風に春の訪れが感じられる今日この頃です。工事中の新図書館は、高い枠組みと厚いシートで覆われて見えません。見えないがゆえに早く新図書館を見たい気持ちになります。私たちは先が見えないと不安になります。でも、ケアの未来を信じて着実に準備を進めていきたいと思えます。

< 広報Web委員会 >

結城佳子
村上正和
忍正人
傳馬淳一郎
MEADOWS Martin
山本達朗